

事例番号 02

Keywords: 全学部, 自閉的傾向, 意思表示, 保健室, 処置の内容理解, 主体性, 障害に基づく困難の改善

(1) 保健室VOCAで要求を伝える支援

(2) 対象生徒

言葉でのコミュニケーションが取りにくい小・中・高等部の児童生徒

(3) 使用する機器

VOCA (たくさんのボタンのもの)

(4) 使用した機器を選定した理由

自分の身体の状況を相手に伝えること、そのために適切な処置をしてもらうことは、生涯を健康的に生活するに当たり、とても重要なことである。

しかし、多くの生徒は今まで、見通しのもてない医療機関受診という状況の中で、多くの検査や嫌な思いやつらい体験、痛い思いをしてきている。そのため、緊急時の医療機関の受診はもちろんのこと、学校での健診やけがの処置、保健室にもあまり良いイメージをもっていない生徒が多く、体調不良やけが等があっても、保健室への来室や処置を嫌がるが多かった。

また、毎朝教室で行われている健康観察について、特に自閉的傾向のある生徒は、自分の体調とは関係なく「元気です」と返事することが多くみられた。

以上のことから、学校在学中に、自分の身体の状態を伝えられること、その結果自分のしてほしいまたはしてもらわなければならない処置を自分なりに理解できること、その流れに見通しを持つことができること、その結果自分自身の身体が楽になる経験を積み上げることで、卒業後においても、主体的に医療機関で治療や処置が受けられることにつながってほしいと考えた。

(5) 選定のプロセス

子どもが見て、処置の内容が視覚的に明確なこと、その内容が音声で確認できること、自分がしてほしい処置や生徒自身が「してもらって良かったな」と実感できる処置を入れることなどの配慮をした(図1参照)。

また、「ありがとうございます」というパーツをいれ、処置や対応終了時のあいさつとともに対応(処置)終了の合図にした。

(6) 個別の指導計画と個別の教育支援計画

記述無し

(7) 指導の内容

年間を通じて、保健室来室時及び養護教諭が対応する場合について活用した。

全学部の児童生徒を対象に活用した。



図4-2-1 保健室VOCA オーバーレイ

(8) 支援機器の使用効果あるいは、指導の効果と支援機器の評価

* VOCA を利用することを来室時や対応時の習慣化により「自分はなぜここ(保健室)に来

ているのか（連れて来られているのか）」生徒自身が明確に理解できるようになった。

- * 対応する教師（養護教諭）にしてほしい処置を VOCA で表現した場合、できるだけ子どもの気持ち（意思）に沿うような処置を行うことで、信頼関係を深めることができ、安心して保健室にくる生徒が増えた。
- * 信頼関係や場の理解が深まることで、保健室や養護教諭への抵抗感が低くなり、してほしい処置だけでなく、子どもにとって嫌な処置をしなければならない場合についても、こちらからも言葉や実物に加え、VOCA で処置内容を伝えることで、見通しを持つことができ、スムーズに処置が行える場面が増えてきた。

例えば、けがをした場合の消毒は、子どもにとって嫌がるストレス度の高い処置であるが、前述のような支援を行うことで、処置の見通しを持つことができ、「消毒は痛いけど、しないといけないんだな」と子どもが受け入れる心の準備をすることで、嫌々ながらも我慢して消毒を受けられる姿が増えていった。

- * 自分から意思を伝える事が苦手な生徒は、VOCA を使用することで、ボタンを押すだけでなく、その後の音声を聞き、それを真似しながら繰り返して言葉で言う姿が見られた。それを何度か繰り返すと、ボタンを押すと同時に（音声を聞くまでもなく）、言葉で伝えられる事ができてきた。
- * 出血や痛みがある場合は、「血が出ている」「おなかが痛い」と表現しやすい。しかし「しんどい」や「身体が重い」等、漠然とした体調不良は、自分の感覚的なものであり、なかなか自分でもわかりづらい。教師から見て「体調が悪そうだ」「元気がない」などと感じて来室をさせた生徒についても、「大丈夫です」「元気です」と返答してしまい、なかなか保健室での対応が難しかった。そういう生徒については、事前に担任と協議し、来室した場合（させた場合）は、VOCA を使い「ベッドで休みたいです」のボタンを一緒に押し、お互いに視覚と音声で確認しながらベッドで休養する経験を意識的に積んでいった。実際に身体が楽になる経験を積み上げることで、「体調が悪いというのはこういうことか」「これをしんどいと表現するんだ」と理解することができた。その経験を積むことで、喘息発作症状の出た時に「休みたいです」と言えるようになったり、貧血時には「ベッドで休ませてください」と自分から保健室に来室できる生徒が増えていった。また、言葉での表現ができない生徒についても、元気がない時に自分から VOCA で「ベッドで休みたいです」と押して、意思表示できる生徒も出てきた。

（9）まとめと今後の課題

学校において保健室は子どもの健康をつかさどる場であると同時に、卒業後も健康的な生活が送れるように支援していく場でもある。そのためには、自分で自分の身体の調子を把握したり、自分に合った方法で誰かにそのことを伝えられたりする力や方法を在学中に学ぶことは、不可欠である。その方法として、子どもにもわかりやすく、使いやすいアシスティブ・テクノロジー等の利用は有意義であった。

また、病気やけがをせずに生涯を送る事は、人間にとって不可能である。もし、そうなった時に、少しでもストレスがなく医療機関等にかかることができ、迅速に適切な処置が受けられるかどうかは、命にかかわってくる。今後は、学校現場での積み上げを卒業後も生かしていくために、主治医や医療機関と連携し、個人に合ったストレスのない医療機関との関係が築けるよう橋渡しができる支援を目指していきたい。

本事例への付加情報

(以下は、研究協議会における本事例に関する質疑の内容である。活用事例を理解する上で注意が必要と思われた場合や、児童生徒の実態について補足が必要と思われたケースについて、実際の指導の様子を理解するために、基本的に録音した会議記録を書き起こしたものである。)

コメント1

(個別の指導計画に記述のないことについて)

保健室 VOCA は私も何回か使っていらっしゃる現場を見たことがあるのですが、おそらく会話、コミュニケーションに課題のあるお子さん達だと思うので、その人達の個別の指導計画を見ていくと、これを使ってどうのこうのということはなくとも、何らかの形でそういう記述があると思いますので、そういうのは書けるのかなと思ったりします。

以上

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジーの活用ケースブック－49例の活用事例を中心に学ぶ導入、個別の指導計画、そして評価の方法－」（2012/3）に記載された内容である。